

現代青年における友人関係の特徴と 心理的適応および学校適応との関連

神戸大学大学院 人間発達環境学研究所 石本 雄真

Relations between Characteristics of Peer Relationships and Psychological Adjustment, School Adjustment among contemporary adolescent

Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University

ISHIMOTO, Yuma

要 約

本研究は、友人関係と心理的適応および学校適応との関連を検討することを目的とした。その際、友人関係をとらえる指標として、現代青年に特徴的であるとされる友人関係のあり方を用いて検討を行った。また、本研究では青年期の発達的变化を踏まえて検討するため、中学生、高校生に加えて、友人関係の成立環境が相似すると考えられる専門学校生を対象として調査を行った。中学生 175 名、高校生 214 名、専門学校生 63 名を対象に質問紙調査を行った。現代青年に特徴的であるとされる友人関係のあり方として、友人との心理的距離、友人との同調性、友人グループ境界の強固性を測定した。さらに、自己肯定意識、学校生活享受感を測定した。その結果、友人関係のあり方、および心理的適応、学校適応についてはほとんど性差がみられなかった。友人関係のあり方については学校段階による差がみられ、心理的距離は中学生よりも高校生の方が遠いこと、同調性は中学生が他の学校段階よりも高いこと、グループ境界の強固性は学校段階が上がるにつれて低下することが示された。また、学校段階ごとに友人関係のあり方と心理的適応、学校適応との関連について検討したところ、主に心理的距離とグループ境界の強固性が心理的適応、学校適応と関連しており、心理的距離が遠いほど、グループ境界の強固性が強いほど、心理的適応、学校適応が低下することが示された。これらのことから、友人関係をとらえる際には多面的な指標を用いることが必要であると考えられた。

【キー・ワード】友人関係、友人グループ、同調性、心理的距離、友人グループ境界の強固性

Abstract

This questionnaire study examined the relationships between friendships and psychological adjustment, school adjustment. And this study focused on friendship styles which are

characteristic of contemporary adolescents. Not only junior high school students and high school students but also vocational school students were selected as participants because it would appear that their environments where they make friends were similar. Participants were 175 junior high school students, 214 high school students and 63 vocational school students. They completed a questionnaire consisted of conformity with friends, psychological distance, strength of the border between groups of friends, psychological adjustment, and school adjustment. The results were as follows. High school students got higher score on psychological distance than junior high school students. Junior high school students got higher score on conformity than others. Strength of the border between groups weakened as an educational phase proceeded. Psychological distance and strength of the border between groups were related to psychological adjustment and school adjustment.

【Key words】 friendship, conformity, psychological distance, school adjustment, strength of the border between groups of friends

問題と目的

2010 年度、中学校の不登校生徒の割合ははまだ 2.77%という高い値を示しており（文部科学省初等中等教育局児童生徒課，2010），継続的な減少へと転換する兆しはみられない。児童生徒の不登校が「学校恐怖症」として注目され始めてから半世紀が過ぎようとしているが，増え続ける不登校に対して，いまだに決定的な対応策が見出せないでいる状態であるといえる。文部科学省が中学校の不登校経験者に対し 5 年経過後に行った調査（文部科学省初等中等教育局児童生徒課生徒指導室，2001）では，不登校を経験した者のうち後悔している者が 36%，不登校の経験が現在の状況にマイナスの影響を及ぼしていると感じている者が 24%，就労・就学ともにしていない者が 23%となっており，不登校経験がその後の人生に望ましくない影響を与えている現状が示されている。毎年 10 万人もの中学生が長期にわたって教育から離れるということは，本人の損失だけではなく大きな社会的損失でもあるといえよう。また国際比較において，学校を楽しんでいる小中学生児童生徒の割合が日本は他国よりも小さいことが示されており（ベネッセコーポレーション，1997；杉村・石井・張・渡部，2007），学校不適応の問題が不登校児童生徒以外にも広く共有されていることをうかがわせる。これらのことから，不登校児童生徒のさらなる増加を防止し，不登校児童生徒数を減少させるべく学校適応に関する議論・研究が喫緊に必要とされているといえる。

文部科学省の調査（文部科学省初等中等教育局児童生徒課，2010）では不登校となっただけとして，中学生では「その他本人に関わる問題」（43.0%：不登校生徒全体の中での該当者の割合）を除くと「いじめを除く友人関係をめぐる問題」（19.1%）の該当者が最も多く，およそ 5 人に 1 人は友人関係をめぐる問題をきっかけとして不登校になっていることが分かる。これまでも，友人関係の問題が不登校のきっかけとなること（北海道立教育研究所，2005；兵庫県立但馬やまびこの郷，2008；文部科学省初等中等教育局児童生徒課，2010；住本，1998；柳原，2008）だけでなく，学校適応に

対して大きな影響を与えるということが明らかにされている（古市・玉木，1994；石津，2007；大久保，2005；嶋田・坂野・上里，1995；山本・仲田・小林，2000）。逆に友人関係における適応は欠席願望を抑制することも示されており（本間，2000），友人関係が適応的にも不適応的にも学校適応と関連することが明らかになっている。しかしながら，これまでの友人関係と学校適応の関連についての研究では，友人関係の指標として親密な友人がいるかどうか（酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村，2002；田中・吉井，2005），友人との関係が良いかどうか（山本他，2000），友人からの受容や拒絶（Berndt, et al., 1999；Buhs, 2005；Wentzel & Coldwell, 1997；Zettergren, 2003）など，概して友人との関係が親密かどうかを用いているものが多い。しかしながら，現代の日本の青年においては親密な友人関係が必ずしも心理的適応につながらないことが示唆されていることから（土井，2008；中西，2005，2008），友人との関係が親密かどうかだけではなく，より詳細に現代青年の友人関係をとらえる必要があるといえよう。

このことに関して，近年青年期の友人関係に特徴的であると指摘される次の3点が友人関係を詳細にとらえる1つの視点となりうると考えられる。ひとつは，友人関係の希薄化と，その進行によってもたらされる友人との心理的距離の遠さに関するものである（栗原，1989；松井，1990；大平，1995；千石，1998，2005 など）。このような指摘は1990年前後からみられるようになり（例えば，栗原，1989；松井，1990），現在もなお友人関係における「やさしさ」をキーワードとして議論が持たれるものである（例えば，土井，2008；森，2008）。そうした関係性は，互いの内面を開示することなく，傷つけあうことがないよう，表面的に円滑な関係をとるような友人関係（岡田，2002）であり，「やさしい」関係であるとされる（土井，2008；森，2008；大平，1995）。ふたつめは友人に対する強い同調性を持つこと（朝日新聞社，2008；唐澤，2001；國尾，2007；中西，2008；上野・上瀬・松井・福富，1994）であり，同じ空間にいなくても電子メールやインターネットのように多様化したコミュニケーション手段を用いて，常に“つながっている”努力をしているという（土井，2004；中西，2005 など）。いまひとつは友人グループ境界の強固さと，それによってもたらされるグループメンバーの固定化である（赤坂，2009；土井，2008；國尾，2007；佐藤，1995）。不登校者の増加と同時代的に指摘されるようになったこれらの友人関係の特徴は，友人関係と強い関連をもつとされる不登校，学校適応問題をとらえる上で重要な示唆を与えるものであると考えられる。実際にこれらのうち，同調性の高さと同調性の遠さの特徴から青年の友人関係をとらえ心理的適応や学校適応との関連を検討したものでは，それらの指標と学校適応との関連が示されており（石本・久川・齊藤・則定・上長・日瀧・森口，2009），現代青年の友人関係の特徴といった視点から友人関係と学校適応の関連を検討することの有効性が示されているといえよう。

石本ら（2009）の研究では，友人との心理的距離の遠さと友人との同調性の高さそれぞれの高低によって4つの友人関係スタイルに分類し，それらの群による心理的適応の差や学校適応の差を見出している。このような分析方法は具体的な友人関係のあり方ごとの適応の特徴を提示できるという点において優れたものであるが，一方で友人関係の特徴のどの側面が適応と関連するのかについては十分に検討できないものである。また，石本ら（2009）らの研究では，現代青年の友人関係の特徴として個人間の関係性の特徴である心理的距離と同調性を取り上げているが，グループ間の関係性の特徴と

いえる友人グループ境界の強固性については検討していない。本研究では友人関係をとらえる指標として、友人との心理的距離および友人への同調性に加えて友人グループ境界の強固性も用いることで、より多面的に友人関係のあり方をとらえることとする。その上で、心理的適応や学校適応とどのように関連するのかについて検討し、学校不適応や不登校を予防するためには友人関係のどの点に注目、介入すべきかについての示唆を得ることを目的とする。その際、友人関係スタイルごとの特徴をとらえるといった方法を用いず、直接的にそれらの指標がどのように心理的適応や学校適応と関連するのかについて検討する。

また不登校問題の中心は中学生であるものの、学校不適応に関する問題は高校生では不登校や中退問題として、大学では不登校やスチューデント・アパシーの問題としてそれぞれ表れてくる問題である。その一方で青年期は友人関係に発達的变化がみられる時期であり、友人関係と心理的適応や学校適応の関連についても学校段階ごとに異なることが予想される。これらのことから、友人関係と心理的適応や学校適応との関連を検討する際には、青年期の友人関係の発達的变化を踏まえて、複数の学校段階における検討が必要であると考えられる。これまでの高校生以降の青年期を対象とした研究では大学生を調査対象者としたものが多いが、中学生や高校生とは異なり大学生では、多くの場合クラスの友人関係というものがなくなるなど、そもそもの友人関係が成立する環境が異なっていると考えられる。そのような環境の変化も含め発達的变化であると考えられるが、中学生、高校生と同様のクラス環境に身を置く青年については大学生とは異なる友人関係の特徴を持つことが予想される。本研究では、中学生、高校生と友人関係成立の環境が相似すると考えられる小規模クラスをもつ専門学校生を対象に調査を行い、同様の環境の中での発達変化について検討することで、発達的变化を踏まえた友人関係と学校適応との関連について検討することを目的とする。

方 法

1. 調査対象者

近畿圏内の公立中学校に通う 1 年生 175 名（男子 93 名，女子 81 名，性別不明 1 名），近畿圏内の公立高校に通う 1～3 年生 131 名（男子 37 名，女子 93 名，性別不明 1 名），九州圏内の公立高校に通う 2～3 年生 83 名（男子 25 名，女子 58 名），近畿圏内の看護系専門学校に通う 1 年生 48 名（男性 8 名，女性 40 名），近畿圏内の保育系専門学校に通う 2 年生 15 名（男性 2 名，女性 13 名）。専門学校生の平均年齢は 21.98 ($SD=5.79$) 歳

2. 調査時期・調査方法

調査時期は 2009 年 7 月～2010 年 12 月。中学校、高校では各学校の教員に依頼し、クラスごとに担任の教員が実施した。専門学校では授業時間に一斉に実施した。

3. 調査内容

(1) 友人との心理的距離尺度 友人との心理的距離を測定するために、石本ら（2009）の「友人との心理的距離尺度」を用いた（10 項目）。高得点であるほど心理的距離が遠いということを示し、希薄化した友人関係を持つことを表す。

- (2) 友人への同調性尺度 友人への同調性を測定するために石本ら (2009) の「友人への同調性尺度」を用いた (10 項目)。高得点であるほど同調性が高いことを表す。
- (3) グループ境界の強固性に関する項目 グループ境界の強固性は本来であれば第三者からの評定等、グループごとの特徴を測定する必要があると考えられるが、匿名性の問題やグループの構造をよく知る第三者の確保の困難さからそのような測定を実施することは難しい。そのため本研究では個々人が所属するグループのメンバーが、グループ境界をメンバーが越えることについてどの程度許容的かについて測定することでグループ境界の強固性を測定することとする。黒川・三島・吉田 (2006)、黒川・吉田 (2007) による個人の集団透過性尺度、三島 (2007) の排他性・親密性尺度、黒川 (2006) の知覚された集団透過性尺度、三島 (2008) の仲間集団志向性尺度を参考に 7 項目からなる尺度を構成した。なお、所属するグループについては「最も一緒にいる時間の長い友だちグループ」と教示をしたうえで回答を求めた。また、そのようなグループに入っていない場合については次の設問に進んでもらうよう求めた。
- (4) 自己肯定意識尺度 心理的適応の指標として、平石 (1993) の「自己肯定意識尺度」を用いた。自己肯定意識尺度は、対自己領域、対他者領域の 2 つの領域から構成され、それぞれ 3 つの下位尺度からなるが、本研究では内容面や項目数を考慮し、対自己領域の「自己受容」4 項目、「自己実現的態度」7 項目、「充実感」8 項目のみを用いた。
- (5) 学校生活享受感尺度 学校適応を測定するために、古市・玉木 (1994) の「学校生活享受感尺度」を用いた (10 項目)。学校生活享受感尺度は中学生を対象として作成されたものであるが、今回は比較検討のため、高校生や専門学校生にも用いた。いずれの尺度についても「あてはまらない (1 点)」から「あてはまる (5 点)」の 5 件法で回答を求めた。

結果と考察

1. 尺度の検討

グループ境界の強固性尺度 7 項目について主成分分析を行った結果、いずれの項目においても負荷量が.754～.500 と高く、第 1 主成分の寄与率は 39.60%であった。また α 係数は.723 となり、項目数が少ないことを勘案すると概ね十分な値が得られた。これらのことから、グループ境界の強固性に関する項目を計 7 項目 1 次元構造のグループ境界の強固性尺度として用いることとした。

すべての尺度について、合計得点を項目数で割った項目平均値を尺度得点として分析に用いた。

2. 友人関係のあり方と学校適応、心理的適応の性差

心理的距離、同調性、グループ境界の強固性、自己肯定意識、学校生活享受感のそれぞれの得点について学校段階別に性別による平均値の差を検定したところ、専門学校生の自己受容において有意な差 ($p < .05$) がみられたものの、中学生、高校生のすべての変数、専門学校生の自己受容以外の変数では有意な差がみられなかった (表 1～3)。

表 1 性別による得点比較 (中学生)

中学生	男			女			t 値
	N	平均値	SD	N	平均値	SD	
心理的距離	89	1.99	.63	78	1.87	.67	1.22 <i>n.s.</i>
同調性	83	3.22	.69	77	3.24	.76	-.10 <i>n.s.</i>
グループ境界の強固性	89	2.38	.68	80	2.26	.70	1.08 <i>n.s.</i>
自己肯定意識							
自己受容	91	3.90	.89	79	4.03	.78	-1.01 <i>n.s.</i>
自己実現的態度	88	3.66	.93	78	3.67	.68	-.09 <i>n.s.</i>
充実感	87	3.65	.88	74	3.78	.74	-1.00 <i>n.s.</i>
学校生活享受感	89	3.56	1.03	75	3.74	.96	-1.18 <i>n.s.</i>

表 2 性別による得点比較 (高校生)

高校生	男			女			t 値
	N	平均値	SD	N	平均値	SD	
心理的距離	62	2.21	.68	148	2.10	.82	.92 <i>n.s.</i>
同調性	60	2.72	.60	149	2.70	.73	.15 <i>n.s.</i>
グループ境界の強固性	61	2.14	.67	146	2.05	.77	.78 <i>n.s.</i>
自己肯定意識							
自己受容	61	3.84	.72	151	3.78	.74	.46 <i>n.s.</i>
自己実現的態度	61	3.25	.78	149	3.11	.86	1.11 <i>n.s.</i>
充実感	59	3.21	.72	147	3.03	.86	1.55 <i>n.s.</i>
学校生活享受感	61	3.08	.85	148	2.84	1.01	1.63 <i>n.s.</i>

表 3 性別による得点比較 (専門学校生)

専門学校生	男			女			t 値
	N	平均値	SD	N	平均値	SD	
心理的距離	10	2.20	.85	53	1.90	.68	1.22 <i>n.s.</i>
同調性	10	2.90	.71	53	2.73	.78	.64 <i>n.s.</i>
グループ境界の強固性	10	1.67	.52	52	1.68	.54	-.04 <i>n.s.</i>
自己肯定意識							
自己受容	10	4.53	.43	53	4.09	.57	2.30 *
自己実現的態度	10	3.94	.89	53	3.65	.68	1.20 <i>n.s.</i>
充実感	10	3.49	1.20	53	3.44	.80	.15 <i>n.s.</i>
学校生活享受感	10	3.45	.71	52	3.17	.98	.85 <i>n.s.</i>

* $p < .05$

多くの女子青年がグループに属し(三好, 1998; 落合・佐藤, 1996), 男子よりも排他性が強い(吉田・荒田, 1997)とされていることから, 同調性やグループ境界の強固性については女子の方が高いことが予想されたが, 本研究ではそのような結果は示されなかった。近年では男女を問わず“空気を読み”周囲に同調する行動が求められているとされることから, これらの性差がなくなりつつあるとも考えられる。

ほとんどの変数に性差がみられなかったことから, 本研究では男女を分けずに分析を行うこととする。

3. 友人関係のあり方の学校段階差

心理的距離, 同調性, グループ境界の強固性のそれぞれの得点について学校段階間による平均値の差を検討したところ, すべての変数で有意な差がみられたため, *LSD* 法による多重比較を行った。その結果, 学校段階間にそれぞれ有意な得点の差があることが示された。心理的距離については高校生が中学生よりも高かった。同調性については中学生が高校生, 専門学校生よりも高かった。グループ境界の強固性についてはすべての学校段階間に有意な差が示され, 中学生, 高校生, 専門学校生の順に得点が高かった(表4)。

表4 学校段階別の友人関係のあり方の平均値および標準偏差

	学校段階	N	平均値	SD	F値	多重比較(LSD)		
心理的距離	中学生	168	1.93	.65	4.05 *	中学生	< 高校生	**
	高校生	211	2.13	.78				
	専門学校生	63	1.95	.71				
同調性	中学生	161	3.23	.72	25.80 ***	高校生	< 中学生	***
	高校生	210	2.71	.69		専門学校生	< 中学生	***
	専門学校生	63	2.76	.77				
グループ境界の強固性	中学生	170	2.33	.69	20.41 ***	高校生	< 中学生	***
	高校生	207	2.07	.74		専門学校生	< 高校生	***
	専門学校生	62	1.68	.54		専門学校生	< 中学生	***

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

石本ら(2009)の研究では心理的距離について学校段階間の有意な差は示されていないが, 本研究ではその結果と異なり, 高校生の方が心理的距離が遠いという結果が示された。一方で, 同調性については石本ら(2009)の結果と同様に中学生の方が高校生よりも高いという結果が示された。石本ら(2009)の研究においては心理的距離と同調性から友人関係スタイルを分類する際, 心理的距離と同調性がともに高い密着群を中学生に特徴的な *chum-group* に対応する群であるとし, 心理的距離が近く同調性が低い尊重群を高校生以降に特徴的な *peer-group* に対応する群であるとしている。このことから, 中学生から高校生になる際, 心理的距離の近さは保ったまま同調性が低下するという友人関係の発達が予想されるが, 本研究の結果からは同調性の低下とともに心理的距離も一時的に遠くなるといった発達が考えられる。しかしながら, 本研究では心理的距離について専門学校生も中学生と同等の得点であるものの高校生との有意な差は示されず, この点については今後の検討が必要である

といえる。

グループ境界の強固性については、年齢があがるほど低くなることが示された。中間報告時(石本, 2010)の学校段階別の分析では、心理的距離とグループ境界の強固性には正の相関が示されており、このことから、中学生よりも心理的距離の遠い高校生がグループ境界の強固性についても強いことが予想されるが、本研究では高校生の方がグループ境界の強固性が強いという結果が示された。これらのことから、中学生や高校生といった学校段階ごとにみると心理的距離が遠い人ほどグループ境界が強いものの、発達の推移としては心理的距離が遠くなる一方でグループ境界の強固性は弱くなっていくということが考えられる。今後は縦断研究や実際のグループの様子を観察する方法などで、より詳細な変化を検討していくことが必要とされる。

4. 友人関係のあり方と心理的適応, 学校適応との相関の検討

学校段階別に友人関係のあり方と心理的適応, 学校適応との相関係数を算出したところ, 学校段階別に相関の様相が異なることが示された(表 5)。心理的距離について, 中学生では自己肯定意識尺度の全下位因子と中程度の負の相関を, 学校生活享受感と弱い負の相関を示した。高校生では自己受容および充実感と弱い負の相関を示した。専門学校生では充実感と中程度の負の相関を, 自己実現的態度および学校生活享受感と弱い負の相関を示した。同調性については, どの学校段階においても自己肯定意識や学校生活享受感とほとんど相関を示さなかった。その中で, 高校生では同調性と自己受容の間に弱い正の相関が示された。グループ境界の強固性については, 中学生では自己肯定意識の全下位因子および学校生活享受感と弱い負の相関を示した。高校生ではほとんど相関を示さなかった。専門学校生では自己実現的態度, 充実感との間に弱い負の相関を示した。

表 5 友人関係のあり方と自己肯定意識, 学校生活享受感との相関係数

学校段階		自己受容	自己実現的 態度	充実感	学校生活 享受感
中学生	心理的距離	-.559 ***	-.482 ***	-.558 ***	-.383 ***
	同調性	-.141	-.128	-.139	-.079
	グループ境界の強固性	-.308 ***	-.238 **	-.258 **	-.201 *
高校生	心理的距離	-.239 ***	-.097	-.261 ***	-.179 **
	同調性	-.354 ***	-.147 *	-.095	.108
	グループ境界の強固性	-.160 *	.043	-.016	-.070
専門学校生	心理的距離	-.141	-.323 **	-.537 ***	-.281 *
	同調性	.000	.101	-.102	.124
	グループ境界の強固性	-.120	-.220	-.275 *	-.092

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

心理的距離についてはほぼ一貫して自己肯定意識と負の関連があることが示された。友人を希求するとされる青年期において, 友人との距離をとるということが心理的適応に負の関連があるというこ

とがあらためて示されたといえる。学校生活享受感との関連については、中学生や専門学校生で弱い負の関連を示したものの、高校生ではほとんど関連を示さなかった。友人関係のあり方についての学校段階差の検討では高校生の友人との心理的距離が中学生よりも遠くなるということが示されており、全体的に友人との心理的距離が遠くなることで学校適応との関連が示されなかったことが考えられる。一方、同調性についてはほとんど心理的適応や学校適応と関連が示されなかった。このことから、同調すること自体は不適応につながらないといえる。同調していても、友人との心理的距離が近く本人も納得の上の行動なのであれば、不適応につながらないことが考えられる。同調行動がどのような意味をもつのかについてはさらに詳細な検討が必要であろう。しかしながら、高校生においては同調性と自己受容との間に弱い負の関連が示されており、学校段階によっては不適応につながる可能性も残されているといえる。グループ境界の強固性については中学生において自己肯定意識や学校生活享受感と弱い負の関連を示した。高校生ではほとんど関連がなかった。専門学校生では、自己実現的態度および充実感と弱い負の関連を示した。グループ境界が強固であるということは、グループ間のメンバー移動が少なく同じメンバーでいつも集まっているということであり、一見親密な友人関係を持っているように思える。また、教員や周囲の人からの評価も親密な関係であるとされることが多いであろう。しかしながら、今回の結果ではグループ境界が強固であることは心理的適応につながらないだけでなく、中学生や専門学校生においては負の関連を示し、学校適応とも中学生では負の関連を示した。このことから、いつも一緒にいる仲良しグループといわれるような集団に属していたとしても、そのことが必ずしも心理的適応や学校適応には結びつかず、むしろ不適応に結びつくこともあるといえる。

総合考察

本研究ではクラス環境を基盤に友人関係が成立すると考えられる、中学生、高校生、専門学校生を対象に調査を行い、友人関係と心理的適応および学校適応との関連について検討することを目的とした。その際、友人関係をとらえる指標として、親しい友人関係を築いているかどうかではなく、不登校者数の増加と同時代的に指摘されるようになった現代青年の友人関係の特徴を用いて検討を行った。その結果、心理的距離が心理的適応や学校適応と広範に関連することが示された。さらに、グループ境界の強固性については、中学生と専門学校生において心理的適応や学校適応と関連しており、グループ境界が強固であるほど、心理的適応や学校適応が低下することが示された。グループ境界が強固であるということは、いつも同じメンバーでグループを形成しているということであり、一見安定的で親密な友人関係を形成しているようにみえるものであろう。また、グループ境界の強固性については「最も一緒にいる時間の長い友だちグループ」を想定してもらった上での回答を求めていることから、それぞれの回答者はグループ境界の強固性の強弱にかかわらず、仲の良い友人グループであると認識していると考えられる。これらのことから、青年期の友人関係についてとらえる際には仲の良い友人がいるかどうかや、友人との親しさを指標とするだけでは十分ではなく、より多面的なとらえ方をしていく必要があるといえる。本研究では友人との心理的距離について中学生よりも高校生の

方が遠いなど、これまでの友人関係の発達に関して指摘されていたこととは必ずしも一致しない結果も示された。このことについては、縦断データを用いるなどの方法でより詳細に発達の变化を検討していくことが必要であるといえる。

引用文献

- 赤坂真二 (2009). 女の子グループにおけるピア・プレッシャー 児童心理, **63**, 328-332.
- 朝日新聞社 (2008). (“RE” の時代 : 1) REACTION<反応> KY キャラで下手こいた 1月1日朝刊
- ベネッセコーポレーション (1997). 第5回国際教育シンポジウム報告書「子どもにとっての教師」——国際比較を通して教師のあり方を考える—— モノグラフ・小学生ナウ 別冊
- Berndt, T. J., Hawkins, J. A., & Jiao, Z. (1999). Influences of friends and friendships on adjustment to junior high school. *Merrill-Palmer Quarterly*, **45**, 13-41.
- Buhs, E. S., (2005). Peer rejection, negative peer treatment, and school adjustment: Self-concept and classroom engagement as mediating processes, *Journal of School Psychology*, **43**, 407-424.
- 土井隆義 (2008). 友だち地獄「空気を読む」世代のサバイバル 筑摩書房
- 古市裕一・玉木弘之 (1994). 学校生活の楽しさとその規定要因 岡山大学教育学部研究集録, **96**, 105-113.
- 平石賢二 (1993). 青年期における自己意識の発達に関する研究 (II) ——重要な他者からの評価との関連—— 名古屋大学教育学部紀要:教育心理学科, **40**, 99-125.
- 北海道立教育研究所(編) (2005). 不登校児童生徒の支援に関する研究——地域 SSC を中核とした実効性のある支援を実現するために—— 北海道立教育研究所
- 本間友巳 (2000). 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理学研究, **48**, 32-41.
- 兵庫県立但馬やまびこの郷 (2008). 平成 19 年度「但馬やまびこの郷サテライト事業」(問題を抱える子ども等の自立支援事業) 報告書
- 石本雄真 (2010). 現代青年の友人関係における個人間の関係性の特徴と友人グループの特徴との関連 発達科学 (財団法人 発達科学研究教育センター), **24**, 185-190.
- 石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平 (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究, **20**, 125-133.
- 石津憲一郎 (2007). 中学生の学校環境に対する主観的重みづけと学校適応——心身の適応との関係から—— カウンセリング研究, **40**, 225-235.
- 唐澤由理 (2001). 男子高校生の友人との同調的行動と心理的距離——友人と共に居ることによる安心感—— 学校メンタルヘルス, **4**, 49-54.
- 國尾一樹 (2007). 空気が読めないといじめられる情報戦, 心理戦の毎日 日経 Kids+, **25**, 20-23.
- 黒川雅幸 (2006). 仲間集団外成員とのかかわりが級友適応へ及ぼす影響 カウンセリング研究, **39**,

192-201.

- 黒川雅幸・三島浩路・吉田俊和 (2006). 仲間集団から内在化される集団境界の評定 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), **53**, 21-28.
- 黒川雅幸・吉田俊和 (2007). 個人の集団透過性に関する構成概念妥当性の検証 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), **54**, 1-10.
- 栗原 彬 (1989). やさしさの存在証明——制度と若者のインターフェイス—— 新曜社
- 松井 豊 (1990). 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫(編) 社会化の心理学ハンドブック——人間形成と社会と文化—— 川島書店 pp.283-296
- 三島浩路 (2007). 小学校高学年児童の友人関係における排他性・親密性と学校適応感との関連 東海心理学研究, **3**, 1-10.
- 三島浩路 (2008). 仲間集団指向性尺度の作成——小学校高学年用—— カウンセリング研究, **41**, 129-135.
- 三好智子 (1998). 女子友人グループに関する一研究——対グループ態度の評価尺度作成の試み—— 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, **2**, 85-94.
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2001). 「不登校に関する実態調査」(平成5年度不登校生徒追跡調査報告書) について <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/13/09/010999.htm>
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 (2010). 平成 21 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/08/_icsFiles/afieldfile/2010/08/05/1296216_01.pdf>
- 森 真一 (2008). ほんとはこわい「やさしさ社会」 筑摩書房
- 中西新太郎 (2005). ポジションどり文化の生きづらさを越えて 生活指導, **612**, 42-49.
- 中西新太郎 (2008). 少年少女の孤立と友だち階層制 生活指導, **659**, 42-49.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- 岡田 努 (2002). 友人関係の現代的特徴と適応感および自己像・友人像の関連についての発達的研究 金沢大学文学部論集(行動科学・哲学篇), **22**, 1-38.
- 大平 健 (1995). やさしさの精神病理 岩波書店
- 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因——青年用適応感尺度の作成と学校別の検討—— 教育心理学研究, **53**, 307-319.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 (2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, **50**, 12-22.
- 佐藤有耕 (1995). 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析 神戸大学発達科学部研究紀要, **3**, 11-20.
- 千石 保 (1998). 日本の高校生——国際比較でみる—— 日本放送出版協会
- 千石 保 (2005). 日本の女子中高生 日本放送出版協会
- 嶋田洋徳・坂野雄二・上里一郎 (1995). 学校ストレスモデル構築の試み ヒューマンサイエンスリサ

一子, **4**, 53-68.

杉村仁和子・石井秀宗・張 一平・渡部 洋 (2007). 児童生徒用ソーシャルスキル尺度開発研究報告書 東京大学大学院教育学研究科教育測定・カリキュラム開発 (ベネッセコーポレーション) 講座

住本克彦 (1998). 人間関係のもつれから不登校になった子ども達の事例を通しての一考察研究紀要 (兵庫県立但馬やまびこの郷), **1**, 17-24.

田中良仁・吉井健治 (2005). チャム体験と家族凝集性が学校接近感情に及ぼす影響 心理臨床学研究, **23**, 98-107.

上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 (1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, **2**, 21-28.

Wentzel, K. R., & Caldwell, K. A. (1997). Friendships, peer acceptance, and group memberships: Relations to academic achievement in middle school. *Journal of Educational Psychology*, **90**, 202-209.

山本淳子・仲田洋子・小林正幸 (2000). 子どもの友人関係認知および教師関係認知とストレス反応との関連——学校不適応予防の視点から—— カウンセリング研究, **33**, 235-248.

柳原 守 (2008). 不登校の要因をふまえた対応について 研究紀要 (兵庫県立但馬やまびこの郷), **11**, 1-8.

吉田寿夫・荒田則子 (1997). とかく女の子は群れたがる?——児童期における対人関係の性差に関する研究—— 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 298.

Zettergren, P. (2003). School adjustment in adolescence for previously rejected, average and popular children. *British Journal of Educational Psychology*, **73**, 207-221.

謝 辞

本論文執筆にあたりご指導いただきました, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 齊藤誠一准教授に御礼申し上げます。調査の実施にご協力いただきました, 伊丹市立総合教育センター 大田規之先生に御礼申し上げます。